# 死神は六花(ゆき）に唄う

鋼玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神は六花（ゆき）に唄う

【Ｎコード】
Ｎ２４５２Ｄ

【作者名】
鋼玉

【あらすじ】
少女は死んだ。そして迎えにきた陰気な死神と出会い、自分の遺した思いを叶えるため、ある決断をする。悲しくも温かい、そんな物語

## （前書き）

この話は『死神の詩』の改訂版もとい、全体書き直し登場人物チェンジといったほとんど別物となっております。あとがきに余章がついていたり……

私は雪が大好きだった。
白銀に輝く六花。
一夜のうちに全てを自分の色に染めあげ、日が顔を出したら潔く消える儚い存在。
だけど人にその一瞬の光景を焼き付ける事ができる存在。

『それ故に決意を揺るがせることはないと？　』
目の前の少年は厳かに、同時に冷淡に呟く。
『ええ。揺るがせるくらいなら消えたほうがマシ』
少女は首に当てられた刃の感触を確かめながらはっきりといった。

＊＊＊

冬深まりし街。
クリスマスが近く、暗くなり始めた街並みを色とりどりの光が彩り、その空に雪が舞い始める。
駅前の広場の真ん中には季節の象徴ともいえる大きなクリスマスツリー。
人々は白く染まり始めたそれを見上げ、あるいはその下で待ち合わせる。

そのクリスマスツリーの中程に少女が腰かけていた。
背中の中程で綺麗に切り揃えられた黒髪にシンプルな黒いワンピース。
漆の様な黒い大きな瞳に紅をさした様な紅い唇。
そして雪のように白い肌。
触れれば壊れてしまうような儚さを感じさせる彼女。

しかし誰も彼女の姿に気づかず、彼女はただ空より舞い落ちる雪を見つめていた。

「雪……」
降り始めた雪を見つめながら彼女はポツリと呟く。
空から降りてきた一片の雪にゆっくりと手を差しのべる。
しかし、羽のような雪は私の掌に舞い降りることなく通り抜けて大地に消える。
「……分かってはいるんだけどね」
雪に触れることができないのは触れるべき身体が既に存在していない故。
「やっぱり……死んじゃったんだね……私」
クリスマスツリーにも腰かけているわけではない。
その高さで浮遊しているだけ。
「……今更どうとなることじゃないけどね」
彼女はじっと手のひらを見つめて溜め息をつき、苦笑する。
「もうどれくらいになるんだろう」
彼女は自分がいつ死んだのか覚えてはいない。
時間の感覚がほとんどないから。
そして彼女は過去を思い出す。

彼女が生きていたころ。
彼女の知る世界は狭く消毒液の臭いが漂う病室と、どんよりとした空気がわだかまる病院の中だけだった。
いつからそんな生活が始まったのか彼女自身は覚えていない。
ただ周りの人間の同情にも似た視線が向けられる自分のことが嫌いだった。

両親にもとても申し訳なかった。
彼女は死にたがっていたといっても過言ではない。
しかし彼女は死ぬその時まで生きた。
死への恐怖、それもある。
だが、いつか治癒できるかもしれない希望が彼女を生かしていた。

『治ったら……なんでもない』

言い掛けて言い淀む。
日に何度かは一人でいる時、いない時構わず呟いた。
希望の中には幽かな、しかし確かな光景があった。

――もし治ったら、雪降る空を見上げたい。

彼女の住む地方は雪が少ない。積もったところですぐ消えてしまう。

だが、彼女の心の中にはその一瞬の雪景色が強く焼き付いていた。
何故なのかはわからない。
だがそれは彼女の心を照らす確かな光明として存在した。

そんな日々を送っているうちに彼女に巣食う病魔は彼女の命を喰らい続け……喰い尽くす時が来た。

その日は珍しく大雪が降り、日が沈んだ後でも月明かりに雪が反射しほんのりと明るい夜であった。
彼女は一瞬苦悶の表情を見せた後、そのまま寝台に倒れ込み動かなくなった。
人の死とはあっけない。
彼女の命もそれに漏れることはなかった。

そしてしばし時間がたって、異変に気づいた医師と看護婦が病室へ訪れ、連絡を受けた両親が駆けつけた頃……すでに彼女は躯となっていた。

その躯から小さな光が出てきて彼女の身体の形に変化した。
「何？　」
その燐光に包まれた彼女はうっすらと目を開け、呟いた。
そして身を起こしあたりを見回す。
泣き崩れる両親。つらそうな顔をした医師と看護婦。そして……寝台に横たわる私。
自分が二人いることを不思議に思いつつ、燐光を放つ、透きとおった両の腕を伸ばす。

彼女は目を閉じ動かないもう一人の頬をそっと包む。
僅かに侵入した自分の指が見えない壁に阻まれ止まる。
温度を感じない。
何かに拒まれたということ以外は何も感じることのない彼女の指先。
もう一人の彼女、つまり躯から手を放し、彼女は拳を握りしめ浮遊したまま蹲る。

そして実感する。
――自分が死んだことを。

いつかはこの時が来るのは分かっていた、むしろどこかで願ってすらいた。
「なら何故こんなに悲しい」
声を絞り出すように自問する。
そう、本心はやはり死にたくはなかったのだ。

生きるという可能性が潰えたこの瞬間、そのことを痛いほど実感した。

「……死にたくない」

心に秘めた感情が堰を切ったように溢れだし、彼女は幻影の様な涙を流し嗚咽を溢し続けた。

不意に彼女は嗚咽を溢しつつ顔を上げる。

視線の先にはいまだ泣き続ける両親。

しかし、その表情は先程とは僅かに変化していた。

ほんの、ほんの僅かではあるが彼女は彼らの顔に安堵の色を見た。

「そっか。そうだよね」

嗚咽が自然と止み、あれほど流れていた涙か止まる。

その代りに顔に貼り付いたのは自嘲の笑顔。

自分のことしか考えていなかった。

両親は無意識ではあるが私を疎ましく思っていたのだろう。

当然だ、こんな自分のことなど疎ましいに決まっている

そう思うと心残りは山のようにあれど不思議と死を受け入れることが出来た。

「さようなら。父さん、母さん」

最後に微笑みかけ、踵を返し、浮遊しつつ窓の外に向かう。

あれほど病室と外を隔てていた窓ガラスをあっさりとすり抜け彼女は雪降る外の世界に出た。

目の前に広がっていたのは幻想的な雪景色。
空を見上げるとふわふわと白い雪が舞っていた。

綺麗……

思わず感嘆の吐息を漏らす。
こんな日に死ねたのだ僥倖といえよう。
目を細めつつその景色を見詰めつつ彼女はふっと微笑む。
サラサラとした長い黒髪と、痩せ細った体に纏った寝間着がゆらゆらと揺れる。

感動のままに、さらに前へ進もうとする。
その時彼女の背後に暗闇から生れ出るように人影が姿を現した。
年は若いようだが陰気な、という言葉が当てはまる能面のような青白い顔の男。
夜の闇に溶け込む様な全身を包む長い黒のローブで身を包み手には背丈ほどもある鈍色の大鎌。
その眼は何の感情もない虚ろという言葉がよく似合う。
男はすっと手を伸ばし、雪に見とれる彼女の肩を軽く叩く。
「誰？！　　」
彼女は弾かれるように振りかえり、同じく宙に浮かぶ男を見て目を見開く。
「死を受け入れているようだな」
そんな彼女の表情から男は何かを読み取ったのか、僅かに眉をしかめ抑揚のない声でそう呟き、予備動作なく虚空に向かって鎌を振るう。

刹那、彼女の中を何かが切れる感覚が走った。
彼女は体のあちこちに触れその感覚の正体を探る。

そしてその感覚が何か理解できた。
――魂と身体が切り離された。
あ……
無意識のうちに声が出る。
ほんの一筋であるが彼女の頬を涙が伝う。

「あなたは誰？　　」
どうしようもない喪失感を少しでもごまかそうと、目を閉じ首を左右に振りつつ尋ねる。
「君は分かっているはずだ」
男は鎌を持っていない方の手で何かを掬い、視えない何かを確認しつつただただ平坦に呟く。
彼女の方は静かに目を開きこくりと頷く。
「ええ……死神でしょう」

死神――
命を刈り取り神の元へ運ぶ忌むべき神。
黒衣に身を包み、大鎌を振るう。

「現実に存在していたなんて……」
彼女は思わず呟き、慌てて手の平で口を塞ぐ。
しかし、男、死神は別にどうと言うことのないようで肩に鎌を担ぎ彼女に手を差し出す。
「行こうか」
彼女は一旦彼の手をとろうとするがピタリと手を停め胸の前で握り締め、うつむく。

「どうした」
死神は訝しげに彼女を見つめる。
彼女は迷い左右に目を泳がせたが決心たようで口を開く。
「……この世にとどまっちゃ駄目？　」
「駄目だ」
死神はやや表情を険しくして手を強く差し出す。
彼女はぼんやりとした目でじっと死神を見つめるだけでその手を握ろうとはしない。
だが、決して無理に握ったりはしない。
「……折角外にでられたのに……外の世界を見て回れるのに」
視線を逸らしごねる彼女に。彼は肩をすくめその生気のない顔をわずかに歪める。
心底理解できないといった様子で口を開く。
「……何故そこまで外の世界にこだわる」
その言葉にぴくり、と彼女は肩を震わせる。
そしてゆっくりと視線をあげ死神を見据える。

「……それが私の生きる理由だったから　」
震えるその声は恐ろしいまでに澄みきった声で響く。
声帯がないので魂全体から声を発する感覚。
魂の叫びとはこのような感じか。
「私は外の世界をいつか歩けると信じて生きてきた。その希望にすがることで生きていられた。死のうがその願いを捨てたくはない」
その言葉は何があろうが曲げたくないといった強い響きを宿していた。
彼はそんな彼女に口を開く。
「だが規則は規則だ」
ただただ職務を成さんとしているだけである。
そんな彼の様子に彼女は、苛立ちを覚える。
自分の気持ちを規則の一つで切り捨てられるなんて嫌だ。

「死神の貴方には分かるわけないわ。人間の気持ちなんて！　」
彼の手を払いのけ感情の赴くままに叫んだ彼女の言葉。
すると死神はここではっきりと表情を顔に出す。それは明らかな悲壮。
「我とて元は人だ。君と反対で自ら命を絶ったのだがな」

一際激しくなった雪が死神の表情を覆い隠す。
「嘘……」
「本当だ。君が外に希望を抱いたのなら我は外に絶望した」
淡々と死神は答え、死神について彼女の知らなかった事実を語る。

曰く、死神は自ら命を絶ちし者への罰。
死した者の魂を引き剥がすことで、己が捨てたものの重さを知れ
この世をさまよい魂を導け。
それが死神の責務。

「そう……」
死神その存在の哀しさを知り、彼女は言葉を失う。
だが、同時に何と贅沢なと感じた。
彼女が渇望した生を捨てたいと思う彼。
その罰を受け続けている彼。
「気持ちは分かる。だが魂はあるべき場所へ帰さねばならぬ。諦めてはくれないか」
非常に気まずい気分の彼女に穏やかな声と共に再び差し出される手。
それを前に彼女は決断しきれず両の腕で自分をかき抱き、うつ向く。

「……何でわざわざ私が手を握るのを待ってくれるの？　」
心の中に渦巻く感情を沈めんと彼女は呟く。
「死者の意思を規則を越えぬ範囲で尊重すべきだからだ。守らぬものも多いがな」
死神はそう答え、どうするんだと尋ねる。それが彼等のせめてもの死者への情けなのだろう。

『選ぶしかないのか……』
死者に決断をゆだねるある意味残酷な問い。
彼女は顔を上げ彼の顔を見るべきか迷い、また俯くことを選ぶ。
腕も所在なく組んだり解いたりを繰り返す。
拒否すればそれで済むのかもしれない。
だが、彼女にはそれがどうしてもできなかった。
それは魂魄の持つ回帰の本能ともいえるものであった。
願いと本能。
ふと、視線を周りに向けると、幻想的な雪景色がその瞳に映る。
彼女は僅かに愛しい者を見るような眼でその景色を見つめ微笑む。
そして一つの答えを導き出した。

「わ、私…死神になりたい」
ただ静かに彼の手を握りしどろもどろに彼女は呟く。
死者の魂を送るためにこの世を訪れる死神。
それが願いと本能に逆らうことのないただ一つの道だった。
「は？　」
彼の目が案の定点になる。彼女はじっと死神を見つめる答えを待ち、死神は暫し思案する。

暫しの沈黙。

先に口を開いたのは死神の方であった。

「……我では判断がつかない。上に伺いを立てねば」
わずかに眉をしかめ彼は呟く。
確かにこんなことを言い出す魂はそうはいない。
死神が忌み嫌われるのは人間に共通だから。
忌み嫌われるものになりたいものなぞいやしない。
「来てくれるか？」
上に伺いを立てるため彼女に来てもらわねばならない。
死神はそう考えた。
その言葉に彼女は笑みを返す。
全てに絶望した死神にとっては視界に入れるだけで眩しく焼き尽くされそうな笑み。
「故に私はあなたの手を握っているのよ」
瞬間、彼女の身体が光の粒子となり、小さな光の球の形に変化した。
死神は僅かに目を細め大鎌の刃の腹でそれを撫で、そっと手で包む。
すると光、彼女の魂は鎌に吸い込まれ消え、それを確認するや否や死神も鎌ごと黒い霧となり消えた。

＊＊＊

何もない場所。
上も下も右も左もなく光に包まれている意外何もない。
そこには一人の少年がいた。
彫像の様な人ならぬ美しさを孕んだ顔。
肩ほどの長さの硝子のような色彩の無い髪が流れ、星の煌めく夜空の色を称えた双眸が神秘的に輝く。華奢な体には銀色の縫い取りのある黒衣を纏い、錫杖を持つように彼の側に控える先程の死神のものより一回り大きく、精緻な細工の為された大鎌を持っている。

その彼は己の顔を大鎌の刃に映しつつ物思いにふけっていた。
時折不思議な色合いを宿した瞳が歪む。
何かを決めかねているような困惑の色を湛えている。
やがてふうと溜息をつき、視線を前に向け口を開いた。

『入れ』
硝子を打ち合わせたような澄んだ声。

瞬間、空間が歪み白を基調とした神殿に変化する。

そして少年の視線の先に黒い霧がわだかまり、人の形をとった。
虚ろな瞳の黒衣の男、あの死神である。
男は恭しく一礼し手に持った鎌を一撫でし、くるりと一回回転させる。
すると鎌の刃から尾を引く様に小さな光が現れ球形になり彼の前に浮遊した。
その様子を見て少年は頷き、こちらへ、と男を呼び寄せる。
男は頷き、少年の傍らで跪いた。

そして少年はじっと浮遊する光を見つめ、男は両の目を閉じ、下を向いてじっと待つ。

『そろそろだ』
少年が呟いた瞬間、浮遊する光は形を変え、再び少女の形をとる。
長い睫、絹糸の様な滑らかな黒い髪、紅をさしたような桃色の唇。
透きとおるような白い身体には何も纏わず。
少年はその様子を瞳に移しすっと彼女に手をさしのばし軽く振る。
すると再び空間がわずかに歪み、白い燐光を放つ長衣が現われ彼女の身体を包む。

そしてそのまま落下し髪が扇のように床に広がる。
「……ん」
しばらくして、少女はゆっくりと瞼を開き上体を起こした。
『……気が付いたようだね』
少女は少年の姿を視界に入れ、きょとんと首をかしげる。
そして慌てて姿勢をただし彼を見上げる。
本来神像などが置かれる台座に腰かけて心底不思議そうな顔の少女に彼は柔らかい笑みを浮かべる。
「ここは？　」
『平たく言うとあの世だね。君はそこの彼に連れられてきた』
少女は一本だけ立てた左の人差し指を唇に当て、視界の端に少年と死神の男を映しつつ考える。
そういえば死神の手を握ったっけ。
その後どうなったのかよくわからないけど。
『ええと僕は死神を束ねるもの。一応神のはしくれだ。君の裁定は僕が引き受けることとなった。どうぞよろしく』
少年、死神を束ねる神はそう気さくに自己紹介をする。
その眼はどこまでも穏やかで同時に冷たく、まるで冬の夜空のようである。
「よろしく……お願いします。裁定って？　」
裁定、その言葉が妙に引っ掛かり少女は頭を下げつつもおどおどと
『君の願いは懸案事項だからね。どういう決定を下すかこういう場を設けないとどうしようもなかったんだよ』
そして続けて彼は彼女にいくつか質問を始めた。
彼女は時折迷いつつもはっきりと答えていく。
それは確認。彼女の意志を確認するための。

『……言い分はわかった。だが外の世界を見るなら、転生すればいい話じゃないかな』
全ての質問が終わり彼は頷きつつ最後にそう尋ねる。
癖のないガラスのような髪が顔の動きを追うように揺れる。
「それはもう私じゃないんでしょう」
前世の記憶とか言う与太話を彼女は聞いたことがある。それは自分の置かれている状況から考えてあながちそうとは思えないが、今の自分になる前の前世なんて覚えちゃいない。
故に彼女は転生すればもうこの想いも何もかも消えてなくなると考え、拒否した。

『……よし、君の意思は理解した』
少年の瞳が一瞬悲しげに歪む。
しかし、次の瞬間には元の穏やかな様子に戻り、鎌を杖に彼は立ち上がる。
そして一瞬にして彼女との距離を詰める。
大鎌を持った手をゆっくりと下ろす。
少女は驚愕に動向を収縮させる。

その刃は彼女の首筋にピタリと当てられていた。

「なっ……」
絶句する彼女を瞳に移しつつ少年ははただ冷徹な瞳で見下ろす。
『願いは受け入れず、その思想危険ゆえに魂の消滅を執り行う』
その裁定は一片の情けのないもの。
転生したくない、この世に留まりたい、魂の渡し守である死神として。
その願いを少年は受け入れず、少女の思想を危険と見た。
その裁定に少年が先ほどまでいた場所の傍らで跪いたままの死神の男は肩を僅かに振るわせ顔をあげる。

そして驚きから我に返った少女が何か言う前に、死神の男の姿が一瞬揺らいだかと思うと少女の前に移動し上司である少年に立ちはだかった。
「どういうことですか！　」
その瞳は虚ろではなく強い意志の光が宿っていた。
そんな死神の様子に少年は露骨に眉を顰める。
『……初めから裁定は決まっていた。特例を許すわけには行かない。死の秩序を守る死神達をまとめるものとしての判断だよ』
少年は諭すように死神に理由を告げる。
その様子は至極落ち着いたもので、少女よりと下に見えても彼は神たる威厳に満ち溢れていた。しかし死神はどこうとしない。
そんな緊迫した光景を少女は自分の事なのに額縁の中の絵をみているような気分で見ていた。あれほど執着はしていたものの神の言葉は正論だと彼女は思った。
願いがかなわず、その願いが害を及ぼさんとするのなら消えたほうがいいのかもしれない
首の後ろにに刃の感触を感じながら思った

神はやはり慈悲深い。
決まっている裁定をわずかでも変えようと彼女に問うたのだから。
しかし彼女はそれでも死神になりたいと願った。

自分のやりたいようにやったのだ。
せめて自分のままで消える事ができるのなら幸運だ。

「私は雪が好きだった。たった一度でいい。雪降る大地に自分の足で立ちたかった」

無意識のうちに彼女はつぶやく。
『それ故に決意を揺るがせることはないと？　』
目の前の少年は厳かに、同時に冷淡に呟く。
「ええ。揺るがせるくらいなら消えたほうがマシ」
少女は首に当てられた刃の感触を確かめながらはっきりといった。
その気持ちは揺るがない。
故に彼女はあきらめた。

そんな彼女を静かに見据えつつ少年はゆっくりとしかし的確に鎌を引く。
彼女は静かに瞼を閉じる。

しかし、鎌の刃は彼女の首を断つ事はなかった。

いつまでも来ぬ滅びを奇妙に思い彼女はそうっと目を開ける。
そこには訝しげに目を細める神と、苦痛に顔を歪める死神がいた。
ただ死神は彼女の首を落とさんと引かれた大鎌の刃をその手で受け止めていた。
刃を受けた手の平はさらさらと砂が崩れるように崩壊し始めている。
「何故、かばうんだい？　　」
心底不思議そうな神に死神はさあ、と首をかしげる。
「自分でもわかりません。ただ望んだままに動いた結果こうなりました」
その言葉の間にも死神の手は崩壊しつつあり、それは次第に腕へ広がっていっている。

張りつめた沈黙。
状況を理解した少女がやめて、と叫ぼうとしたとき刃がすっと引かれた。
神を見上げると夜空の色の瞳を閉じられ苦笑めいた笑みが浮かべられている。
そして溜め息と共に口が開かれた。
「負けたよ」
「え？　」
見つめる彼女に神は肩をすくめ、どこか晴れやかな表情で新たな裁定を下す。
「死神になることを認めよう」

ぼんやりと空を見上げ過去を思い出していた彼女の思考は、やっと現在へ戻る。
「結局、誰かに助けられ、今があるんだよなぁ」
あの時、死神がかばってくれなかったら彼女はここにいない。
結局誰かに助けられてばかり。

この雪と同じか。
冬と言う季節にしか存在できない、誰かに助けられないと存在できない儚きもの。
それは概して全ての命に言えるのかもしれないが。

死神として命を導く。
心残りを残し、どうしようもなく涙を流すかつての自分のような魂を見るのは辛い。
だが……恋焦がれた世界をみることができる。
至極利己的なことだが、彼女は後悔していない。

その時、ふっと頭の中に何かがよぎる。
「そろそろ時間か」
死神は自分の送るべき死人を閃くように感知する。
「……随分、数が多いな」
今回は随分多いようだ。
事故だろうか。
悲しいが仕事をしなければならない。
それが契約。
雪はいつの間にか止んでいた。
積もった僅かな雪はすぐに溶け消えるだろう。
まるで人の命のように。
だから彼女は彼らの事を胸に刻もうとする。

そう思いつつ胸の前で祈るように手を組む。
すると手の間から光が溢れ、鎌の形をとった。

刃の先まで純白の鎌。
死神の鎌はその魂によって形を変えるあの神の断片。
雪に焦がれた彼女に非常によく似合う鎌である。

愛おしそうに鎌の刃、そして柄に指を這わせる。
鎌の刃の付け根に刻まれた六花の彫刻にそっと口づけ、鎌をそっと抱く。

「真白（ましろ）」
生まれたときに名付けられ、死神としても名乗り続ける名を呼ばれて視線を動かすとそこにはあの死神の男。

『一応監視のために、彼と仕事をしてもらうよ』
あの神の少年は彼女に死神としての力を与えた後そう言った。
『君が彼をどう変えるのか興味があるしね』
一瞬腕が再生し始めている死神の男を見て、そういたずらっぽく彼は片目を閉じた。

「行くぞ」
出会ったときのままの無表情で差し出された手を握る。
ただ、その相貌は温かい光を宿していた。

――ほんの一瞬彼が笑ったような気がした。

「どうしたの？　　」
「……」
問いに沈黙で答え、彼は彼女の手を引き、行こうと促す。

暖かいのか冷たいのかわからない彼の手の感触を確かめ、彼女は頷き歩き出す。

祈るように
願うように

**（後書き）**

長文お読みいただきありがとうございました。
前回書いた時より成長していれば、と思います。
ご意見ご感想お待ちしています。

また、今回蛇足でしかない余章を掲載。
神様も色々大変だったり。
では、どうぞ。

余章、いや蛇足章

「これでよかったのかなぁ……」
再び光に溢れる空間で少年は自問していた。
死を担う神の一人として間違ってはいないかと。
「いいんじゃない？　」
少年の腰かける空間のすぐ傍から女性が姿を現した。
強い癖のある銀髪に青空の様な色の瞳。
金の縁取りのある白いドレスに、禍々しい意匠の漆黒の斧槍。
「姉様。見ていたの？　」
少年の呟きに女性は頷きどこか似た面影のあるその顔を笑みの形に歪ませ、彼と目線を合わせるように膝を曲げる。
「あんたは気張りすぎなのよ。ちょっとくらい甘いのがちょうどいいの。神は何のためにあるの？　」
「世界の安定のため」
魂を消滅させる役割を担う彼女はその激しさに似合わない笑みを見せる。

その笑みに少年は僅かに表情を綻ばせるが静かに首を左右に振り呟く。
「だって母様がああだから僕がしっかりしないと」
自分たちの上位にあって、人間に極端に甘い。
職権濫用甚だしい母の姿を思い出しつつ少年は言葉を濁す。
今回の話も二つ返事で許可するだろう。
「……母さんは確かに人間に激甘だしね」
苦笑しつつ斧槍を置き、女性は少年の両肩に手を置く。
「でも姉ちゃんが保証するわ。あの死神はあの娘と出会って何かが変わった。あの子なら死者に救いを与えられるはず」
「うん、確かにね」
ただ陰気で虚ろな瞳の一般的な死神である彼があのような行動に出たのは驚きだ。
それはよいことかもしれない。
「でしょう？　」
そう言って女性は心底楽しそうに笑う。
心の中でこっそり蛙の子は蛙だしね、と苦笑しつつ。
「んじゃ。がんばりなさい可愛い弟よ！　」
肩から手を放し斧槍を手に取り、空いた手で少年の頭をくしゃくしゃと撫で彼女は去って行った。
残された少年は一人だけの空間で唯思う。
ちょっとくらいは正しかったのかな、と。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2452d/

死神は六花(ゆき）に唄う

2010年11月6日01時56分発行